

「令和8年度を迎えて」

教職実践高度化専攻 専攻長 上地 広昭

私の専門は健康心理学という学問で、現在、「よい人生とは何か」というちょっと哲学的なテーマについて研究しています。「よい人生」というと、多くの人は幸福な人生や有意義な人生を思い浮かべるかもしれませんが、もちろん、それらもよい人生に違いありません。しかし近年の心理学では、それらに加えてもう一つ「心理的に豊かな人生」という考え方が注目されています。

心理的に豊かな人生とは、新しい経験や予想外の出来事、様々な人との出会いを通して、自分の見方や価値観が変化していく人生のことです。必ずしも楽しい経験ばかりではありません。時には失敗や葛藤を伴うこともあります。しかし、その経験を通して「世界の見え方が変わった」「以前とは違う視点で物事を考えられるようになった」と感じられるとき、人は人生の豊かさを実感すると考えられています。



私はこの考え方に触れたとき、「よい学び」もまた同じなのではないかと思うようになりました。私たちは学びというと、新たな知識や技能を身につけることを思い浮かべます。もちろんそれも大切です。しかし、よい学びとは、単に知識が増えることだけではなく、自分自身の視点が変化することではないでしょうか。授業や実習を通して、「そんな考え方があったのか」と驚いたり、「自分は一面的に物事を見ていたのかもしれない」と感じたりした経験はないでしょうか。そのような瞬間に起こっているのは、知識の増加ではなく視点の変化です。

知識は足し算ですが、視点の変化は掛け算です。

同じ出来事から受け取れる情報や意味が何倍にも広がるからです。

そして、そのような視点の変化を生み出す環境こそが、教職大学院の大きな価値の一つだと思います。経験豊富な教員から実践的な知識を学び、異なる校種や専門分野、経験をもつ仲間と交流する中には、自分とは異なる価値観に触れる機会が数多くあります。時には、自分の考えが揺さぶられたり、これまで当たり前だと思っていたことに疑問を抱いたりすることもあるかもしれません。

今後、教育現場を取り巻く環境はこれまで以上に大きく変化していくと考えられます。そのような時代だからこそ、教師には知識や技術を学び続けるだけでなく、自らの見方や考え方を問い直し、新たな視点を取り入れ続ける姿勢が求められます。

教職大学院での日々が、皆さんにとって新たな視点との出会いに満ちた時間となることを願っています。そして、本教職大学院がそのような教師を育む場として、さらに発展していくことを期待しています。

「『学びのコミュニティ』への挑戦」

学校経営コース長 佐々木 司

今年度、学校経営コースの大学教員は、「学びのコミュニティ」の構築に挑戦しています。昨年8月、教職大学院設置10周年を記念して「実践研究推進大会」が開催されました。同大会では、修了生・現役院生・大学教員が一堂に会して議論を行いました。従来、教職大学院や学校経営コースという枠を越えた学びの場の拡張を求める声が寄せられました。一般に学校は時間と空間によって同定される組織ですが、学習そのものは本来、それらを越えて展開されるものです。枠や領域、境界を適切に維持しつつも、それらを柔軟に乗り越えていく。この方向性について、昨秋より検討を重ねてきました。

その具体的な取組として、昨年度後期には附属光義務教育学校と連携した「ゼミ・エクステンション」を実施しました。大学院で実施しているゼミをアレンジして、児童生徒、教員、保護者等にも参加していただきましたが、今年度はこれを「出前ゼミ」としてさらに広げ、山口市・防府市・萩市の各教育委員会および山口県教育委員会の支援を受けながら、「学びのコミュニティ」の形成を進めています。いわゆる「ラーニング・ポッド」は、学習を既存の時空間から取り出し、新たな場へと展開する考え方ですが、この発想を援用し、学校経営コースでも学びを学外へと広げるとともに、外部参加者の知見からも学ぶ双方向的なコミュニティづくりに取り組んでいます。

なお、通常この種の実践は大学院生を中心に行われることが多いのですが、教員自らが枠を越えて行動するその姿を院生に示すことも、建設的な変革と創造には不可欠であると考えています。そのため、あえて大学教員を中核に据えて取組を進めています。今後の展開にぜひご期待ください。

「今後の教職大学院のさらなる発展に向けて」

教育実践開発コース長 藤上 真弓

本コースは、卓越した実践的指導力を有し、学校内や地域における教育実践や協働的な研修活動を創造・牽引する力を有する若手教員の育成を目指して創設され、おかげさまで11年目を迎えました。3人の指導教員や学校実習校の先生方のアドバイスを受けながら、自ら設定した研究課題を深掘りできるとともに、教職大学院と実習校での学びをつなぎ、理論と実践を往還しながらこれからの教育をデザインする力を養える環境であるところが、教職大学院の魅力の一つです。また、他コースである学校経営コースと特別支援コースの経験や専門性も異なる院生たちと、仲間として切磋琢磨できるところが、力量を高めていく上での強みであると考えています。

本年度は、これまでの10年間の教職大学院としての積み重ねをもとに、これからの新たな10年を生み出していく重要な節目となります。この10年間で、教育を取り巻く環境は激変しました。生成AIなどデジタル技術の発展、多様な個性や特性、背景をもつ子どもたちへの対応など、学校現場が直面する課題はより複雑さを増しています。こうした変化の激しい時代だからこそ、自ら学び続け、未来を切り拓く教員の存在がこれまで以上に求められています。

次の10年に向け、修了生が現場で輝き、現役生が生き生きと学び、地域の学校が元気になる、そんな、関わるすべての人にとって、“ワクワク”や手応えを実感できる魅力的なコースとなっていくよう、これからも進化を続けます。

関係者の皆様、どうぞ今後とも、変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「ようこそ特別支援教育コースへ」

特別支援教育コース長 松岡 勝彦

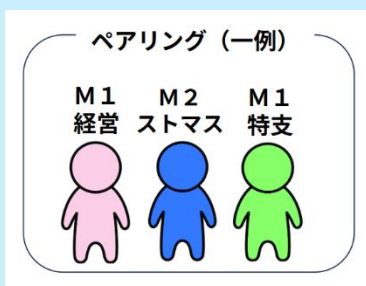
令和8年度の山口大学教職大学院特別支援教育コースでは、4名の新入生の皆さんを迎えました。2年生とあわせて計6名となります（現職教員の院生2名、ストレートマスターの院生4名）。当コースの設置目的は、特別な教育的ニーズのある幼児児童生徒の実態に即した効果的かつ効率的な指導力、関係者とのコーディネーション能力等を備えた地域や学校をリードできる人材を育成することです。この目的を実現するため、理論（教職大学院における講義・演習）と実践（学校実習等の教育実践）を往還するプログラムを取り入れています。大学における講義・演習では、現職教員の大学院生とストレートマスターの院生がともに参加し、学ぶことができるので、現職教員にとっては、ストレートマスターの持つ研究知見、すなわち実証的研究の動向、再現可能な方法、効果検証法等について学ぶことができます。また、ストレートマスターにとっては、現職教員の持つ教育現場におけるさまざまな情報—今日的課題のみならずその課題をクリアしたときの達成感・充足感などを含む—に触れることができます。このような院生から、私たち大学教員も刺激を受け、教育・研究・地域連携に精進したいと存じます。特別支援教育コースをどうぞよろしくお願いいたします。

教職大学院の学びを覗いてみよう👁️【ペアリング】

教職大学院では、3～4名で学年・コース横断の交流グループを編成することを「ペアリング」と呼んでいます。

毎週木曜にはランチミーティングを行い、コースを超えた交流を深めています。今年度は毎月第3木曜日に「ペアリング」で集まるなどの工夫をしています。学校実習や研究のことなど、ストレートマスターの悩みを現職教員と分かち合う時間でもあります。

「学校実習のことなどを気軽に相談できる先輩ができて心強い」「ストレートマスターの新鮮な視点に、自分自身も多くの気づきをもらっている」といった声も聞かれ、学年や立場を超えた学び合いの機会となっています。



院生に密着

院生のリアルな日常や実践を紹介する企画です。3名の院生が教職大学院で学び、実践し、成長していく姿を1年間を通してお届けします。

学校経営コース

「高橋院生の一週間に密着！」

①プロフィール

学校経営コース 2年 高橋 悠 院生

原籍校：下関市立向洋中学校

研究キーワード：「キャリア教育」 趣味：バスケ、わかめうどん

②一週間のスケジュール

【4, 7, 10, 1月】

曜日	月～金	土・日
主な活動	講義	バスケ・課題研究

【5, 6, 8, 9, 11, 12, 2, 3月】

曜日	月～水	木	金	土・日
主な活動	学校実習	講義	学校実習	バスケ・課題研究



③密着インタビュー

Q1 教職大学院に進学した理由

勤務校の校長先生より教職大学院派遣の話をいただいたことが最初のきっかけです。校長先生からは、2年間で自分が研究したいことをじっくり深められると言われ、それなら今、自分が担当しているキャリア教育について、知見を深めたいと思ったことがきっかけです。

Q2 現在研究していること

テーマは「キャリア教育における生徒の主体的・対話的活動を生み出す組織的な取組の推進—小中一貫を核とした地域の特色を生かして—」です。組織的というのは、小・中学校、地域、近隣の高等学校や大学を含めながら、幅広い年代や多様な人との関わりの中で進めるキャリア教育をイメージしています。

Q3 教職大学院に入って変わったこと

教育実践や業務について考える際、先行研究、論文、理論、法律、地域課題といった、物事のバックボーンや本質はどこにあるのかという視点をもつようになりました。また、課題研究を進めていく中で、所属校以外の学校や地域のまちづくり協議会と連携するために、学校外の方と協働していく姿勢も身につきました。

Q4 一番大変なこと

所属校では課題研究を進める際の教職員の心のマネジメントだと思います。人によっては知見を深めたい分野が生徒指導であったり、学習指導であったりします。そういった方も、共にキャリア教育や小中一貫教育の推進に向かうようにしていくことに苦心しています。大学の講義では、事前、事後課題の作成に時間をかけています。また、資料の事前の読み込みも気になる内容、分からない専門用語を調べる必要があります。そのため、と

にかく時間はいくらあっても足りません。

Q5 今年度の目標は？

昨年末に日本キャリア教育学会に入会しました。学会に入る事は人生で初めてです。学会の研究会、発表会に参加して、最新のキャリア教育を研究している方との繋がりを積極的に作っていき、課題研究を進めていきたいと考えています。

④周囲の人から見た高橋院生

第一指導教官 坂本哲彦先生

高橋院生さんは、入学当初から、キャリア教育の推進について、①小中一貫教育を核にすること、②地域の接続校や社会との連携を踏まえること、そして、③組織的に取り組むことの3点を軸に進めてきています。管理職や同僚の教員とともに、ぶれることなく取り組む姿は、教職大学院生にふさわしい姿だと感じています。

また、生徒の主体的・対話的な活動を生み出そうとする視点は、キャリア教育を一層生徒自身のものにしていく上で、重要な観点です。特に、中学校区にある複数の高等学校や、すぐ近くにある大学とも、直接学び合う学習を創り出してきました。また、地域の組織ともつながりを深めています。市内の他の小・中学校などに普及していく上でふさわしい具体的内容があり、今後の研究の発展が楽しみです。

教職実践開発コース

「後藤院生の一週間に密着！」

①プロフィール

教職実践開発コース2年 後藤 海翔 院生

実習校：山口市立小郡中学校

研究キーワード：「課題難易度と情報提示方法」

趣味：釣り



②一週間のスケジュール

曜日	月	火	水	木	金	土・日
主な活動	探究	学校実習	学校実習	講義	講義	部活

③密着インタビュー

Q1 教職大学院に進学した理由

中学生の頃から「理科の教師になりたい」という夢を持っていました。そのため、まずは理科の専門知識を深く学ぶために山陽小野田市立山口東京理科大学へ進学しました。学部生時代にも教育に関する基礎的な知識や指導法についての勉強は重ねていましたが、「もっと教育について専門的に、深く学びたい!」という強い思いが湧き、教職大学院への進学を決意しました。

Q2 現在研究していること

私は、中学校理科の授業における生徒の理解を支援するための情報提示の在り方について実践研究を進めてきました。中学校3年生を対象に、板書を通して説明する方法(板書型提示)、完成したスライドを通して説

明する方法（静的スライド提示）、さらにスライドにアニメーションを加え、情報を段階的に提示しながら説明する方法（動的スライド提示）の三つの情報提示方法による教育的効果を比較しました。その結果、動的スライド提示は、難しい学習課題において情報量を抑えながら重要な内容へ注意を向けやすくし、生徒の理解を支える効果が見られました。また、板書型提示には、生徒の思考を整理する時間として機能するなど、それぞれの情報提示方法には異なる特徴があり、学習課題の難易度によって教育的効果が異なることが明らかになりました。現在は、学習課題の難易度に応じて情報提示方法を使い分ける授業設計について実践研究を進めています。

Q3 教職大学院に入って変わったこと

人とのつながりが広がったことです。それに伴い、自分が挑戦できる活動の幅も大きく広がりました。例えば、課題研究とは別に地域連携教育について探究していますが、自分一人では限界があります。そこで、教職大学院の教授のご紹介を通して、地域連携教育に携わる方々とはつながる機会をいただきました。このように、大学の教授や院生、実習校の先生方、地域で活躍されている専門家など、多様な人々と関わることで、さまざまな価値観に触れ、自分自身の探究の質が高まっていると感じています。

Q4 一番大変なこと

教職大学院では、講義、課題研究、学校実習という三つの柱があります。この三つをどのように結び付けながら学びを深めていくかが、一番難しいと感じています。やりたいことが次々と出てくるため、優先順位を付けながら時間を管理することも欠かせません。講義で得た学びを課題研究や実習につなげたり、実習で生まれた問いを課題研究テーマへと発展させたりするなど、三つの活動を往還させることを意識して取り組んでいます。

Q5 今年度の目標は？

今年度は、先ほどの三つの活動に加えて地域連携教育についても探究したいと考えています。地域連携教育に関わることで、「学校の外側の世界」を知り、「学校の役割とは何か」を考える姿勢を大切にしたいです。また、活動を通して生まれた問いに対して、自ら足を運び、多様な人々と関わりながら学びを深めていきたいと考えています。問いを立て、自ら検証するために行動できることは、教職大学院生だからこそ得られる学びだと思います。さまざまな地域連携の活動に積極的に参加し、試行錯誤を重ねながら、自分自身の視野をさらに広げていきたいです。

④教職大学院を一言で表すと？

「アカデミックな探究ができる場所」です。教師になってから現場で経験を積み重ねることももちろん大切ですが、私はその前に、教育を学問として捉える「アカデミックな視点」を身に付けたいと考え、教職大学院に進学しました。大学院では、第一線で活躍される先生方のお話を伺い、それを自分なりに咀嚼し、新たな問いへとつなげることができます。そして、その問いについて時間をかけて探究し、学校実習で実践しながら検証するという、理論と実践を往還する学びが経験できます。このような環境の中で、教育を実践だけでなく学問としても探究できることこそ、教職大学院ならではの魅力だと実感しています。

特別支援教育コース

「神原院生の一週間に密着！」

①プロフィール

特別支援教育コース 2年 神原 由菜 院生

実習校：山口大学教育学部附属特別支援学校（中学部）



研究キーワード:「自由進度学習」

趣味:料理づくり(ご飯系もスイーツ系も何でも作ります!)

②一週間のスケジュール

【実習月】

曜日	月・火	水	木	金	土・日
主な活動	学校実習	バイトや課題研究	講義	バイトや課題研究	バイトや課題研究、余暇

【大学月】

曜日	月・水・金	火	木	土・日
主な活動	バイトや課題研究	学校実習と講義	講義	バイトや課題研究、余暇

③密着インタビュー

Q1 教職大学院に進学した理由

学部生の時は、小学校が主免許状となるコースに在籍していましたが、教員採用試験では特別支援学校(小学部)を受験し、採用をいただきました。しかし、このまま現場に出るには、不安が大きく、より特別支援教育について専門的に学びたいと考え、教職大学院の進学を決意しました。特に、山口大学教職大学院には、応用行動分析学について専門的に研究されている教授が多いことから、深く学べる環境だと感じました。また、教職大学院では「理論と実践の往還」を大事にされており、特別支援教育における様々なアプローチを学びながら、課題研究として現場において実際に実践ができるところに魅力を感じたためです。

Q2 現在研究していること

現在、特別支援学校における自由進度学習をテーマに課題研究を進めています。昨年度は、中学部国語科において自由進度学習を行い、生徒の相互交渉、教師の言語称賛が増加したり、教師のプロンプトが減少したりする成果を得られました。今年度は、数学科の授業で自由進度学習を行い、授業参加が難しい生徒や突発的に発言をしてしまいがちな生徒に対して、個々の支援に繋がれるような課題研究を進めたいと考えています。

Q3 教職大学院に入って変わったこと

大きく二つあるのかなと思います。

一つめは、「学びに対する姿勢」です。学部生の頃は知らないことも多く、とにかく多くの情報から知識をインプットしていくことが多かったように思います。しかし、教職大学院に入ってから、知識をインプットするだけでなく、「本当にそれでよいのか」「なぜなのか」などのように、自分自身に問い、学びをより自分事として捉え直すことができるようになってきているのではないかと思います。論文一つを読むにしても、その中から疑問を見つけ、他の院生と話し合うことで新たな課題や価値観に出会うことがあります。今の自分や状況に満足することなく、より良くするにはどうしたら良いのか考え続けられる人になりたいです。

二つめは、「人との繋がり」です。学部生の頃だけでは出会えなかった多くの先生方や学びに出会うことができていると感じます。憧れの先生に出会えたり、他の院生と話す中でこれまで考えていなかった価値観に触れたりする機会を多く得ています。この2年間で出会えた人との繋がりは、これからの教員人生においても、私の支えや憧れとして大きな意味があると感じています。また、これまで多くの方に支えていただき、今があることに感謝しながらも、いつかは自分が誰かの憧れになったり誰かを支えられたりできる人になりたいです。

Q4 一番大変なこと

実習校に行き始めた最初のころが一番大変だったように思います

院生という実習生ではありながらも、一人の教員として扱っていただけることはとても嬉しかったですが、自分がどこまで生徒に関わってよいのか、学校の先生方にどのように思われているのかわからなかったため、実習校での自分の立ち位置に迷ったことがありました。今では、学校実習を重ねていくごとに生徒との距離感はもちろん、先生方とも支援について話したり、他愛もない話をしたりできるような関係性を築くことができています。「神原先生がいてくれて良かったよ」と伝えてくださったり、「神原先生はどう思う?」と意見を求めてくださったりする実習校の先生方には感謝してもしきれません。残りの学校実習も、生徒のために実習校の先生方と頑張っていきたいと思います。

Q5 今年度の目標は?

「教員 0 年目として行動する」ということです。まだ、学校現場には出てはいないが数か月後には教員になっています。昨年度は、教職大学院での生活が初めてのことで、目の前のことを何とかこなすうちにあっという間に終わってしまいました。そのため今年度は、現場の教員としてどうするか、どう分析するのかを考えながら、教職大学院での勉強や実習校での実践を行いたいです。

Q6 教職大学院を一言で表すと

「広がり」です。これまで話してきた通り、人との出会い、学びなどがどんどん広がっているように思います。教職大学院での生活も残り8か月ほどになりました。これからも色々なことに挑戦しながら、人との繋がりや学びを広げていきたいです。

④周囲の人から見た神原院生

特別支援教育コース2年（現職教員） 佐々木優子先生

神原院生は、自分の機嫌を自分でとれる人。周囲に対していつも笑顔で、安心と元気という栄養を与えてくれます。それは特別支援学校の先生にとってはとても大切な要素で、障がいがある子や周囲の教員も「神原先生と学びたい」と思う人がたくさんいるのではないかと思います。周囲に見せるポカポカ感とは別に、目の前の課題に真摯に向き合う、自分には厳しい真面目な面も。きっと、バランスのとれた素敵な先生になるんだろうなと思います。

知ってほしい！ 山大教職大学院



①山口大学教職大学院ニューズレター「学燈」をぜひご周知ください。

【バックナンバー】は、こちらの二次元コード、または「山大学燈」で検索を。

②山口大学教職大学院ではオンデマンド説明会を実施しています。

職場や研修会に院生が出向き、教職大学院について説明させていただきます。

お気軽にご相談ください。

【申し込みはこちら】 <https://forms.gle/y7SriFDsxhemCfjR6>

